

した。

4) Fallot 四徴 (TOF) 術後症例における Late Potential (LP) の検討 — 長期術後の VT 発生を予測できるか —

佐藤 誠一 (新潟こばり病院) 小児科
福嶋 英樹・佐藤 勇 (新潟大学小児科)
塚 薫
渡辺 弘・宮村 治男 (同 第二外科)

1954年に Lillehei らにより、TOF 根治手術が施行されて以来、診断学の発展と、手術手技・体外循環・心筋保護の飛躍的向上により、外科的治療成績は各施設で安定してきている。一方、長期術後における突然死や不整脈など、新たな問題も提起されるようになり、もはや手術成績そのものではなく、術後生活能力の質的向上をめざす時代となっている。今回は、体表面微小電位を用いて LP を記録して、術後の心室性不整脈との関係を検討した。

症例は5歳から48歳までの計15例(中央値は13歳)で、男性が8例、女性が7例であった。4例に電気生理学的検査(EPS)が施行され、3例にVTが誘発され、1例にLPが検出された。それまでにVTが確認されていた症例は1例のみであった。

体表面微小電位の記録にはフクダ電子社製 VCM-3000を用い、LPの検出には vector magnitude (VM) 法と multiphasic oscillation (MC) 法を用いた。VM法では、右脚ブロック症例の右室電位そのものが遅れを呈しLPと区別できず、さらに左室のLPもマスクされてしまう可能性があり、TOF術後のLP検出には不相当と考えられた。MC法では、右室流出路に相当する胸壁に電極を置くことにより、右室流出路切開部局所でのLPを検出できる可能性があった。

EPS症例が少ないため、EPSでのLPとの比較は困難であったが、症例を重ねて術後の心室性不整脈との関係を検討したい。

第71回新潟臨床放射線学会

日 時 平成3年12月7日(土)
午後2時より

会 場 新潟大学医学部 第2講義室

一 般 演 題

1) 子宮体癌傍腫断端再発の Au-198 グレイン組織内照射による治験例

稲越 英機・斎藤 真理
伊藤 猛・吉村 宣彦
土田恵美子・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

子宮体腺癌で子宮全摘およびFAMT療法10回が行われ、8年後傍腫断端組織に再発した75歳症例に、手術拒否のためAu-198グレインの組織内照射を行った。

膀胱、直腸および腹膜に近接する直径2cm球形の硬腫瘤に対し直径3cmの球形治療容積を想定し、MSKCC法に準じ5mCiのAuグレイン16個を刺入した。一部の線源は基靭帯基部側にやや離れ、また腹膜腔に1個逸脱したので、2カ月後縮小した腫瘤に同強度4個を追加刺入した。

X線撮影および経過CT所見から有効線源は13個のみであると仮定すると、MPD:57Gy, CLPD:69Gy, RMD:80Gyと計算されるが、追加刺入は腫瘤縮小後のため実際の腫瘍線量はこの値よりやや多いと推測される。なお、この容積の組織耐容線量は、Rnシードの場合110Gyと見積られている。

治療後5年経過するが、再燃は認められず、副障害も全く認められない。本例は組織内照射のよい適応であったと考えられる。

2) ¹⁹²Iridium thin wire による気管支腔内照射の試み

斎藤 真理・樋口 健史 (県立がんセンター) 新潟病院放射線科
栗田 雄三・木滑 孝一
横山 晶 (同 内科)

近年、肺癌の集団検診に喀痰細胞診が行われるようになり、胸部X線写真無所見の肺門部の早期肺癌が発見されることが多くなってきた。このような症例は、手術や外照射で対処されてきたが、呼吸機能が悪く手術の適応外とされる症例も多く、また、外照射では手術例に比し、再発例がやや多くみられる傾向があることから、再発例を減らすこと、呼吸機能もできるだけ温存することを目